

宣教ウィズ With

手をつないで放送伝道

ラジオ「世の光」
テレビ「ライフ・ライン」を
放送している協力会と
「共に」宣教を進めるニュースレター

No.8 2017.6
[不定期発行]
太平洋放送協会(PBA)

「福音」というバトン



私は福音を恥とは思いません。
福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、
信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。
（ローマ人への手紙1章16節）

4月10日、敬愛する羽鳥明先生が、96歳で
天に召されました。

ここ数年、各地に何うと必ずといっていい
ほど「羽鳥明先生は、お元気ですか？」と声
をかけられました。また、「羽鳥明先生は以前、
私たちの教会にも来てくださったんですよ！」
という声もいただきました。そのような声を
聞かされた時に、ここにも先生が来られたんだ！
日本全国で羽鳥先生の足跡がないところはな
いのか？と思わされるほどで、このことは
大きな驚きです。

さて、先生が、天に召される2週間ほど前、
ほとんどベッドの上で眠られている状態であ
りましたが、突然、目を開けメッセージを語り始め
たということです。そして、急いで家族がそ
の様子を撮られた映像が、4月17日に行われ
た葬儀式で流されました。

地上での最後のメッセージといえるその内
容は、以下のようなものです。

「神様、あなたの恵みによって、私たちは新
しいのちを与えられ、新しい人生を送るこ
とができます。」

私は16歳の時に、罪に目覚め、罪を恐れ、
罪を悲しみ、そして、神様の恵み、神様の救い、
神様の本来に新しい生活を経験するようにな
りました。

私たちの子どもの時に、私たちが悪いこと
を知るといことは、あんまりしません。悪
くないと思つてやっています。

しかし、本当にイエス様の十字架の光の前
に、私たちが思い切つて、神様、お赦しだ
さい。神様、新しい人生を与えてください。
そういうふうには、悔い改めてクリスチャンに

なりました。
クリスチャンの中でも、本当に苦しみを受
けて、本当に罪の贖いを受けることができる、
そのことは、なんといい恵みでしょうか！」

羽鳥先生の原点ともいえるこの「喜び」こ
そが、数え切れないほどのメッセージを生み
出し、日本全国をくまなく訪問し、さまざま
な働きを展開していった原動力なのだと思います。

映像の最後に、長女のナオミさんから、父
親でもある羽鳥先生に向けた一言が紹介され
ました。

「パパ、本当にご苦労様でした。パパは本当
にどこを切つてもイエス様でした。最後のメッ
セージありがとう。最後の励ましありがとう。
10日前に本当に会えてよかった！」

しっかりと福音のバトン受け取っています
よ。わたしたち、決して落としませんから安
心して見守っていてください。本当に本当
にありがとう。」

16歳から96歳まで80年神様に従い切つたパ
パ、万歳！ 神様にハレルヤ！

長女・ナオミより

「世の光」「ライフ・ライン」などの福音放
送は、「福音」というバトンを運ぶためのもの
です。福音放送は、遠くにも、近くにも、開
ざされた場所にも、心の中にも、このバトン
を届けていくことができます。

今の時代、不安や懐疑心など暗闇が蔓延し
ている時代です。私たちはさらに、福音放送
を通して暗闇を照らし出す「福音」というバ
トンを渡し続けていきたいと思います。

北日本放送「世の光」協力会 「世の光聖書講演会」

3月26日(日)、富山福音キリスト教会で、「世の光聖書講演会」が行われました。富山(北日本放送)では、ノンクリスチャンの方を誘いやすいようにと、リスナーのつどいを「講演会」という名称にしているそうです。毎年、3月に行われる「世の光聖書講演会」を楽しみにしている方も多く、今年も100名の方が集まりました。

今回の講師は羽鳥頼和牧師、音楽ゲストは、地域の女性聖歌隊と北陸地方を中心に活動をしているジーバーズのお二人です。ジーバーズの賛美はとても温かく、地元の皆さんに愛されています。ジーバーズさん、今年は東京にも進出とのこと！これからお会いできる機会も増えるかもしれません。



羽鳥頼和師のメッセージ



ジーバーズの賛美



女性聖歌隊

放送伝道ヒストリー 各地域での放送伝道の歴史

中国地方放送伝道協力会

中国地方放送伝道協力会は、今年37年を迎えました。事務局長の大保順一氏に、協力会創設時のことを伺いました。

当時「世の光」の放送がなされていなかったのは、大きな都市では広島地方だけだったそうです。後に委員長になられた単立広島キリスト教会の植竹利侑牧師は、以前から羽鳥明牧師の話を聞いていて「広島でもその様なラジオ伝道が出来れば良いのになあ」という思いを持っていました。

ちょうどその頃、羽鳥明牧師が広島にいられて、広島での牧師会が招集されました。「ぜひ広島でもラジオ伝道をしてほしい」という要望でした。それに加え「もし、広島地方でラジオ伝道をするのであれば、300万円の献金をしたいという方がおられる」ということでした。

しかし、牧師会の雰囲気は否定的だったようです。いくら300万円の寄付があるとはいえ、放送伝道には電波料を含め月々60万円(当時の金額)はかかることが分かっていたからです。重苦しい空気の中、会議が休憩に入った時に、出席していた3人の信徒の方が植竹牧師を脇に引き寄せて「先生やりましょう。先生が事務局長になってくださいれば、協力しますから……」と言って強く後押しを

し、植竹牧師もこれに勇気づけられ決心をされたそうです。

こうして全国でも珍しい「信徒主体の運営」により、1980年4月1日、ラジオ「世の光」がスタートしました。後日談ではありませんが、その当時植竹牧師も自身の教会が新会堂を建築したばかりで大変悩まれたそうですが、信徒の方々の熱い思いに励まされたという話でした。

その後37年間、主の憐みと恵みにより、広島地方の教会の皆様方の支えにより守られてきたことを感謝いたします。(文・大保順一)

2017年1月に開かれた事務局会議には、いつもより多くの協力教会の牧師方や、宣教団体の代表の方々が出席してください、普段より拡大された事務局会議が開かれました。放送エリアも広い中国放送です。多くの教会にご理解いただき、ひとりでも多くの方に協力をお願いして、ひとりの魂のための放送を継続していただきたいと心から願われました。



事務局会議の様子



祈禱会にて(「世の光」を支えてきたメンバー)

『宣教 With』は、各地の放送伝道協力会に向けた広報誌です。各地の協力会のお働きの紹介をしながら、皆様と共に宣教の働きをさせていただいている太平洋放送協会(PBA)のことについても、情報をシェアできればと思っています。